

○北朝鮮に似てきたミャンマー

バリ島での会議に出席した帰りに、タイのバンコク、チェンマイに寄りました。ミャンマー(ビルマ)の軍事政権によってタイの国境地帯に追われる少数民族の難民キャンプを視察することと、そこで活躍する国際 NGO や各民族の連帯組織の代表に会うこと。さらに、ミャンマーでの暴動取材で軍によって殺害された長井記者のアシスタント関係者の日本への亡命について、現地のチェンマイの総領事館と打ち合わせをすることが目的でした。

国境地帯に 12ヶ所ほど開設された難民収容所では 15 万人といわれる難民が生活しています。一方で、あてどなく国境侵犯をしてタイになだれ込んでいるミャンマー人は 200 万人を超え、都市部を中心に低賃金の建設労働やサービス業、また、子どもの人身売買、売春での奴隷化、麻薬組織など社会の底辺を構成する中で、いまや、タイの大きな政治課題になっています。

訪れたのは、バンコクから車で 4 時間ほどのタムヒン収容所。子どもを含めた 7000 人が、幽閉状態で毎日の生活をおくっています。欧米の NGO が中心となって基本的な衣食住と医療の供給を担い、国連の UNHCR がコミュニティ維持のための隙間的な仕事を分担していました。タイ政府は彼らを難民と認定せず、国境を不法侵犯した者とみなしています。しかし、ミャンマーに追い返すことまではせず、人道的に一時避難民という定義で、制限を加え収容所に囲い込んでいるのです。住居は全て山に生えている竹で作り、一年毎の建て替えが前提。金銭収入に結びつく(定住できる条件)仕事には就くことをさせずに、職業訓練どまりで、キャンプの外で働くことも厳禁。大人がすることがない、生気がつぶされていく、ミャンマーに帰れる当てもない。このような状態がここでは 15 年以上も続いています。

当面の緩和策として、ここ数年にわたって、アメリカやカナダを中心に第三国移住制度による難民の受け入れが始まっています。各地の収容所から、1 万人が海を渡りました。

村の代表たちから、潤んだ眼差しで、「私たちは、日本にぜひ行きたい。日本は、どうして受け入れてくれないのか。」と、問い詰められ、胸が詰まる思いでした。

チェンマイに集まってきた支援 NGO や少数民族の代表たちは、ミャンマーの状況に危機感を募らせています。中国の資源外交をバックに、山間地での鉱山開発やダム建設が加速していて、そこに住む少数民族は村を焼かれて集団移住を強いられている。難民の数が増え続けています。多くの村人たちが銃に追われ、山間のジャングルを現在もさまよい続けているのです。

○生活も守りたいし、道路も作りたい？

ガソリン税をリッターあたり 25 円下げて、国民の生活費にかかる負担を少しでも和らげるか、それとも道路をこれまで以上に作り続けるべきかという選択が、道路特定財源にかかる議論です。自民党は、10 年間現在の制度のまま、道路は、特別だと言う結論を出しました。私たちは、ガソリン税は 25 円下げようという結論を出しました。ただし、それで減る税収については、地方自治体の使う分を減らすことはしないということと、これまでの道路に限った使い道を転換して、何にでも使え、その優先順位はそれぞれの自治体で決めることができる仕組み(補助金の一般財源化と収入が少ない自治体に厚く財政調整した上での一括交付)にすることを提案しています。

子ども手当、農業の戸別所得補償や年金の一元化と最低保障を全額税方式でやるなど、来年に向けての税制、予算議論は白熱します。ねじり鉢巻で分かりやすい政策をひねり出していきます。

○今年一年、ありがとうございました

今年も暮れようとしています。国会が延長されたこともあって、歳を越してお正月が来るという気分になれないのも困ったものです。しかし、来年は、勝負の年。この国の再起動、新しい時代作りに頑張ります。今年一年、お世話になり、本当にありがとうございました。来年もよろしくお祈りします。